



ウズベキスタン共和国,タシケント医学アカデミー・
フェルガナ分校(Tashkent Medical Academy,
Fergana Branch, The Republic of
Uzbekistan)と福島県立医科大学看護学部との第2回
国際学術交流およびシンポジウムに関する報告書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 福島県立医科大学看護学部 公開日: 2010-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 亀田, 政則 メールアドレス: 所属:
URL	https://fmu.repo.nii.ac.jp/records/2000513

国際学術交流委員会報告

ウズベキスタン共和国, タシケント医学アカデミー・フェルガナ分校 (Tashkent Medical Academy, Fergana Branch, The Republic of Uzbekistan) と福島県立医科大学看護学部との第2回国際学術交流および シンポジウムに関する報告書

看護学部国際学術交流委員会

同国際学術交流委員会委員長 亀田 政則

I 看護学部における国際学術交流の これまでの経緯

福島県立医科大学看護学部国際学術交流委員会では、1998年の設立以来、様々な海外の諸大学・研究機関との学術交流を模索してきたが（米国オレゴン州ポートランド大学、テキサス大学ヒューストン校、タイ王国コンケン大学、米国MDアンダーソンがんセンター、オレゴン州ヘルスサイエンス大学、中国武漢大学）、いまだ特定の大学・研究機関との協定を締結し、学術交流をおこなうには至っていなかった。

そのような状況のなか、2008年5月、伊藤司氏（元福島県立医科大学学長・現同大学名誉教授）を介して、ウズベキスタン・タシケント医学アカデミーフェルガナ分校（Tashkent Medical Academy, Fergana Branch）からの医療交流の要請があった。国際学術交流委員会はこの案件を協議し、中山洋子看護学部長をはじめとする計3名の看護学部教員をフェルガナ分校に派遣し（同年9月19-24日）、交流にかんする情報収集と協議をおこなうことを決定し、教授会の承認を受けた。

同年9月21日に開催された「日本とウズベキスタンの看護医療教育に関するフェルガナシンポジウム」では、今後の相互交流について意見交換をおこない、第2回シンポジウムを2009年度に福島県立医科大学において開催することで意見が一致し、これを「覚え書き」に記した。今回のシンポジウム（2009年10月8-10日）は、以上の経緯を受けて開催された。

II タシケント医学アカデミーフェルガナ分校 (Tashkent Medical Academy, Fergana Branch) と第2回シンポジウムを開催する意義

福島県とウズベキスタンは、およそ30年に亘る文化経

済交流をおこなっている。とりわけ、伊藤司氏を会長とする「福島県ウズベキスタン文化経済交流協会」は県民による草の根レベルの活動と福島県国際交流委員会の協力によって支援されており、その貢献は国内外においても高く評価され、2009年度の「外務大臣表彰」を受賞するまでに至っている。

福島県立医科大学とウズベキスタンとの交流を顧みると、これまでにウズベキスタンから医師・看護師が医科大学附属病院での研修を受けるために短期間来訪していたという経緯がある。しかしながら、その後の交流は途絶えていた。

看護学部国際学術交流委員会は、

- (1) 過去10年間の学術交流のあり方を顧み、そして今日に至るまで、いかなる海外の大学・研究機関とも学術交流が協定に至るまで結実しなかったことを深く反省した。
- (2) 30年にも亘る福島県とウズベキスタンとの文化経済交流の実績を高く評価し、そのなかに看護医療教育にかんする交流を含めることによって、行政レベルにおける「福島県の国際交流活動」と「県民の草の根レベルでの交流」と協働することには大いに意義があると判断した。また、それによって、福島県による県立医科大学の特色を打ち出せる可能性を考慮した。
- (3) ウズベキスタンの看護教育にはJICAや日本の看護大学（例：大分県立看護科学大学）などのサポートによりカリキュラムの刷新がおこなわれているが、それが実効性を有するまでには長い時を要すると考えられる。とりわけ地理的・文化的にも恵まれていないフェルガナ分校はその事例に漏れない。それゆえ、学術交流をとおして、本学看護学部が貢献できる可能性は大きいと判断した。

第2回シンポジウムでは、看護学部教員を総動員し、本学看護学部とタシケント医学アカデミーフェルガナ分校との協力関係による覚え書き（2008年9月22日付）にある項目に基づき、タシケント医学アカデミーフェルガナ

分校と本学看護学部との学術交流の具体的ありかたについて協議することによって、看護学部教員の国際学術交流への意識を喚起し、今後への展望を開くことに主眼を置いた。

Ⅲ 学術交流日程およびシンポジウムのプログラムについて

(A) 開催期間：2009年10月8日(木)－10日(土)

(B) ウズベキスタンからの招待教員

- (1) フォジイル・ラスロフ学部長 (Professor Fozil Hasanovich Rasulov, MD, Dean of Tashkent Medical Academy, Fergana Branch)

(2) ライミヤノフ・アブドラジズ内科部門長 (Professor Raimijanov Abdulaziz, MD, Director of the Internal Medicine Department, Tashkent Medical Academy, Fergana Branch)

(3) ニシヨノヴァ・アブドラシノヴァ高等看護部門長 (Nishhanova Aziza Abdurashidovna, Director of the High-qualified Nurses Department, Tashkent Medical Academy, Fergana Branch)

国際学術交流委員会は、ウズベキスタンからの招待教員が当医科大学および附属病院にかんしての若干の知識をもっていただいたうえでシンポジウムに臨まれるよう考慮し、当初以下のような計画を立案した。

日	時	内	容	備	考
10月8日(木)	10:30-11:30	学長表敬訪問・オリエンテーション			
	11:30-13:00	ウェルカムランチ	5階教員ラウンジ		看護学部教員全員参加
	13:30-14:00	病院見学(案)	NICU		
	14:00-15:00		① ICT ラウンド	森 浩子, 吉田明子 (感染管理認定看護師)	
			② 病棟での直接ケア (皮膚・排泄ケア認定看護師)	斎藤優紀子 (皮膚・排泄ケア認定看護師)	
	15:00-15:30		病棟での直接ケア (がん性疼痛認定看護師)	村松順江 (がん性疼痛認定看護師)	
15:30-16:00	※現在調整中であり, 正式依頼未	4 E, 救急センター		※当日見学可能な状況であれば	
10月9日(金)	10:20-11:50	看護学部3年生技術演習見学 清拭 清拭と寝衣交換 洗髪 陰部洗浄 足浴 バイタルサインの測定	実習室B, C (学生演習は8:30-11:50)		川島理恵, 清水昌美, 石田登喜子, 鈴木学爾他
	12:00-13:00	ランチ	未定		
	13:00-15:00	スキルラボ・講義見学			
10月10日(土)	10:00-12:30	シンポジウム	N301		看護学部教員全員参加
	12:30-13:30	フェアウェルランチ	3階学生ラウンジ		看護学部教員全員参加
	13:30-15:00	今後についての話し合い	N301		看護学部教員全員参加

10月8, 9日には, 福島県国際交流協会から通訳1名(ロシア語-日本語)

10月10日には, 日本国際協力センター通訳1名(ロシア語-日本語)

10月13日には, 福島県知事の表敬訪問をおこなった。

しかしながら, 各方面と再協議・再調整をおこなった結果, 計画の変更を余儀なくされ, 実際の見学内容は以下のとおりとなった。

2009年10月8日(木)

ウェルカム・ランチ

11時30分から13時まで, 看護学部棟6階の学生ラウンジにおいてウェルカム・ランチを行った。亀田委員長による来日の歓迎のあいさつの後に, フォジイル・ラスロフ学部長, ライミャノフ・アブドラジズ内科部門長, ニシヨノヴァ・アブドラシノヴァ高等看護部門長の自己紹介が行われた。その後, 中山看護学部長, 亀田委員長はじめ, 看護学部国際学術交流委員全員の自己紹介が行われた。

食事は日本の食事を味わっていただくために, 和風弁当を用意した。食事終了後, 亀田委員長からウェルカム・ランチ後の附属病院の見学, 9日の演習見学, スキルラボ見学, 10日のシンポジウム等の福島県立医科大学滞在期間中の予定について説明が行われた。

【午後】 附属病院見学(ウズベキスタン・フェルガナ分校教員3名, 通訳: 福島県国際交流協会タチヤナ氏, 同行: 亀田, 古橋)

附属病院見学の目的はウズベキスタンの医療・看護の事情を考慮し, 日本の医療現場や, そこで看護師がどのような役割を發揮しているかを見ていただく機会とすることを考えたためである。

13:00-13:10 竹之下附属病院院長への挨拶

13:10-13:30 看護部への挨拶

看護部室のメンバーと担当する役割をご紹介いただく。さらに, 附属病院の組織および看護部の組織構成について説明をいただいた。

13:30-14:00 NICU見学

NICUの今野師長に, NICUの看護体制や看護業務, 設備の概略について説明をいただく。NICUにおける即時検査設備の整備状況, 子どもが装着している器具などについて質問があった。

14:00-15:00 ICTラウンドへの同行(アブドラジズ内科部門長, 亀田)

ICT(金光部長をはじめ, 感染管理認定看護師の森看護師長および吉田看護師を含む)のラウンドに同行

させていただき, 4階西病棟およびICUにおける活動の様子を見学させていただいた。

14:00-15:00 皮膚・排泄ケア認定看護師の実践活動の見学(ラスロフ学部長, アブドラシノヴァ高等看護部門長, タチヤナ氏, 古橋)

事前に皮膚・排泄ケア認定看護師の斎藤看護師を通じて, 外来での直接ケア場面を見学させていただく予定にしていた。しかし, 当日予定されていた患者様が来院キャンセルされた。そのため, 斎藤看護師に急遽調整いただき, 9階東病棟の患者と遊佐看護師長の許可を得て, ストマケア場面を30分程度見学させていただいた。見学後, 処置に使用されていたディスプレイブル物品に興味を示していた。

15:10-15:40 がん性疼痛認定看護師の実践活動の見学

事前にかん性疼痛認定看護師の村松看護師を通じて, 入院中の患者様にご了解をいただき, アロママッサージの施術場面を見学させていただいた。

15:40-16:30 ヘリナースおよびドクターヘリの活動の説明およびヘリポート見学

4階東病棟の渡部師長との間で, 当日の状況によって見学の可否を判断することとなっていたが, この日は台風の通過に伴い, ドクターヘリの出勤がなかった。そのため, ヘリナースとして控えていた宮崎看護師に案内をお願いし, 指令室, ヘリポートを見学させていただいた。指令室に待機していた救急科部長の田勢医師にも, 急遽ドクターヘリの活動実績や活動の詳細についてご説明いただいた。

2009年10月9日(金)

技術演習見学

領域別実習前の学部3年次生を対象に, 基礎的な看護技術を復習するための演習を企画し, 実施した。企画当初は, 学内で行われている看護技術演習の見学を予定していたが, 見学可能な演習が予定されていなかったため, 国際学術交流委員と5領域実習担当者共同の企画として行った。演習に際しては, 事前に3年次生に参加希望と演習希望内容を調査し, 清拭, 洗髪, 陰部洗浄, 足浴, バイタルサインの測定について, 各コーナーを設けて実施した。演習当日は50名を超える学生の参加があり, ウズベキスタンからの招待教員には, 各々の実施内容を見学していただいた。見学者らは, 学生の行っている演習内容を質問したり, 写真に収めたりしている姿が多くみられ, 興味を示されている様子が伺えた。また, バイタルサイン測定のコーナーでは, ラスロフ学部長自らが患者役となり, 学生に計測してもらう場面もあり, 学生との交流を図る機会となっていた。

スキルラボ見学および講義見学

スキルラボの教育への導入は、本学でも始まったばかりであるが、教育の新たな取り組みの紹介として、3名の来福者にスキルラボベーシックとアドバンスの見学をしていただいた。アドバンスでは、医学部教員の協力のもと医学部生5～6名を対象とした腹腔鏡手術シミュレータ実習の見学やコンピュータ制御された人体模型の操作や聴診体験をしていただいた。また、マジックミラーを通して、コンピュータ室から見学・指示ができる診察室の紹介も行った。ベーシックにおいては、アドバンスと同様のモデル人形について、その操作の実際を体験していただき、今後看護学部生のヘルスアセスメントなどに活用していきたい旨を伝えた。

その後、学部2年次生のヘルスアセスメントの講義を見学していただいた。80名を超える学生が一斉に講義を受けている様子から、見学者より「演習も同様の人数で行うのか」といった質問があり、講義と演習の違いについて説明した。また、資料の準備方法など講義の具体についても質問があり、実際の様子を見学していただくことで、より踏み込んだ質問のやりとりが行えたと思われる。

2009年10月10日(土)

第2回シンポジウム

テーマ：タシケントメディカルアカデミーフェルガナ

分校における看護実践と教育

会 場：看護学部棟【3階 N301 講義室】

司 会：亀田 政則

10：00－12：30 シンポジウム

1. 学部長挨拶 看護学部長 中山 洋子
2. カウンタープレゼンテーション：黒田真理子教授
3. タシケントメディカルアカデミーフェルガナ分校における看護実践と教育：ニシヨノヴァ・アブドラシノヴァ高等看護部門長、ライミヤノフ・アブドラジズ内科部門長
4. 質疑応答

はじめに、黒田教授が「福島県立医科大学看護学部の教育を通しての日本の看護の紹介」と題してプレゼンテーションをおこない、その後アブドラシノヴァ高等看護部門長によるタシケント医学アカデミー・フェルガナ分校の概要と教育活動についての紹介、さらにアブドラジズ内科部門長からは New Initiatives in Nursing Education という題名で、フェルガナ支部における看護教育カリキュラムについてのプレゼンテーションがおこなわれた。

12：30－13：30 フェアウェル・ランチ フェルガナ分校教員、福島県立医大職員・学生、通訳

午前中のシンポジウム終了後の12時30分から、看護学部棟3階の学生ラウンジにおいてフェアウェル・ランチが行われた。当日はラスロフ学部長、アブドラジズ内科部門長、アブドラシノヴァ高等看護部門長の3名に、福島県ウズベキスタン文化経済交流協会の伊藤司会長、穴戸利夫理事長、中山洋子看護学部長、亀田政則国際学術交流委員会委員長ほか看護学部教員28名、合計35名の参加があった。

亀田委員長の「第2回のシンポジウムが行えたことに感謝する。午後の今後の話し合いを経て、両大学の学術交流が発展することを願っている。」との挨拶の後に、参加者全員でフェアウェル・ランチを頂いた。

13：30－15：00 今後の学術交流のあり方についての話し合い：司会 亀田 政則

当日午前中に開催されたシンポジウムの出席者の内訳は、看護学部教員(28名)、企画財務課(1名)、大学院生(5名)、看護学部生(1名)、福島県ウズベキスタン文化経済交流協会(2名)、県北保健所(1名)であった。

また午後には開催された今後の在り方についての話し合い(出席者：看護学部教員27名、企画財務課1名)では、以下の「覚書」にあることが相互承認された。

IV タシケント医学アカデミー・フェルガナ分校と福島県立医科大学看護学部との今後の学術交流に関する覚書

2009年10月10日(土)に開催された学術交流シンポジウムにおいて、タシケント医学アカデミー・フェルガナ分校と福島県立医科大学看護学部との「今後の学術交流のあり方」に関する意見交換が行われ、以下の点について意見の一致をみた。

1. コミュニケーションの方法について

- (1) 通常のコミュニケーション言語は「英語」とする。但し、重要事項に関しては、お互いの母国語(ロシア語・日本語)で取り交わす。
- (2) タシケント医学アカデミー・フェルガナ分校のコミュニケーション窓口は、フォズイル・ラスロフ教授(フェルガナ分校学部長)と、ニシヨノヴァ・アブドラシノヴァ氏(フェルガナ分校高等看護部門長)の2名で担当する。福島県立医科大学看護学部の窓口は、中山洋子教授(看護学部長)と亀田政則教授(国際学術交流委員長)の2名が担当する。

2. 文化・宗教・生活習慣について

文化・宗教・生活習慣については、お互いに尊敬し大切にしながら交流していく。

3. 今後の交流について

- (1) 年1回程度のペースで交流を継続する。
- (2) 「看護学の教育」に焦点を当てて交流する。
- (3) ワークショップやセミナーなどの形式を取り入れ、具体的な交流を展開しながら継続していく。なお、どのような形式で行うかは情報交換しながら協議する。

4. 今後の予算措置について

- (1) タシケント医学アカデミー・フェルガナ分校、福島県立医科大学看護学部がそれぞれに交流の財源を確保できるよう努力する。
- (2) 財源確保を相互に確認しながら今後の交流について協議していく。

5. 以上について、ロシア語・日本語で明文化したものをお互いに取り交わす。

(N. B. 覚え書きのなかの1の(2)にある福島県立医科大学看護学部の窓口担当者は、2008-2009年度に限ってのことである。)

V 今後の課題

- (1) まず、これまでおこなわれてきた看護学部における国際学術交流を「公立大学法人福島県立医科大学の国際学術交流」として一元化し、事務局との連携、財源について再構築する必要がある。過去10年間、これらの点について反省はなく、その結果、看護学部におけ

る国際学術交流活動は大学内においても周知されず、共通認識されてはこなかった。事務局との連携もなく、看護学部教員がすべての業務をとりおこない、活動の財源は看護学部の予算でおこなわれてきた。これに対し、医学部における国際学術交流は事務局と連携し、大学の財源によっておこなわれてきたことを考えれば、整合性がない。

一法人二システムの国際学術交流を一元化し、事務局に英語コミュニケーションに優れた担当者を登用するなどして、事務的手続きを集約することによって合理的かつ効率的な国際学術交流を推し進めるべきであると考ええる。

- (2) 看護学部は国際学術交流の趣旨と方向性を明確に打ち出し、その活動が大学において共通認識されるよう努める必要がある。例えば、看護学部は国際学術交流プログラムを看護教育カリキュラムのなかに積極的取り入れ(例:国際看護学などを新たに設ける)、時代の動向と需要に応える必要がある。また、医学部が武漢大学との間でおこなっているような教員および学生の交換留学・研修などを含めた包括的な学術交流を構築する必要がある。そのためには財源措置を明確にすることが求められる。

VI 謝 辞

タシケント医学アカデミー・フェルガナ分校と福島県立医科大学看護学部との第2回国際学術交流およびシンポジウムの開催に際しましては、福島県立医科大学、同医科大学附属病院、福島県国際課、福島県ウズベキスタン文化経済交流協会(伊藤司会長・宍戸利夫理事長)の関係各位さまには、深いご理解と多大なご支援を戴きました。ここに感謝と御礼を申し上げます。